

心と言葉の翻訳

言葉から言葉ではなく

心から心へ

成瀬由紀雄

SAMPLE

翻訳は人間の仕事である。それは心と心をつなぐ営みだからである。機械には言葉と言葉はつなげて心と心をつなぐことはできない。心と心をつなぐことができるのはただ人間だけだ。

言葉ではなく人間を中心に据えた翻訳観。それが本書をつうじて流れる通奏音である。

目次

はじめに	6
【要約】	6
【理論編】	9
1 章 翻訳の前提	10
【要約】	10
1. 言語・思考・認識	10
言葉のレンズをとおして世界を認識する	11
「モノ」と「コト」	12
天の視点・人の視点	12
2 章 翻訳の基盤	14
【要約】	14
1. 翻訳の基盤	14
翻訳「術」「論」でなく翻訳「観」が考察の出発点	14
「言葉の変換」という翻訳観	15
2. 「心と言葉の翻訳」の翻訳観	15
言葉ではなく人間を中心に据えた翻訳観	15
実践につながってこそ翻訳研究	15
効率性や簡便性はほどほどに	15
心に響く翻訳文を	16
3. 「心と言葉の翻訳」の翻訳の前提	16
■前提 1：完全な翻訳はあり得ない。訳文は翻訳者によって異なる	16
■前提 2：翻訳は原文に忠実かどうかでなく、生み出した価値の大きさを評価する	17
■前提 3：「ことば」ではなく「ところ」を翻訳する。	17
■前提 4：「思考の基本単位」を翻訳の基本単位とする	17
■前提 5：テキストを全体として翻訳する	17
■前提 6：英日翻訳と日英翻訳に同じ手法を用いる	18
4. 翻訳の規律	18
■規律 1：わかっていないことは訳してはいけない	18
■規律 2：おかしい文章は書いてはいけない	19
理想と現実のはざままで	19
3 章 「心と言葉の翻訳」	21
【要約】	21

1. なぜ翻訳「モデル」か	22
2. 「英文和訳モデル」.....	23
3. 「英文和訳 + 編集」モデル	24
英文和訳モデルだけでは本当に駄目なのか	25
和文英訳モデルはこれまで存在しなかった	26
新たな翻訳モデルへ.....	26
4. 「心と言葉の翻訳」とは	27
「ゲーム・チェンジャー」としての「心と言葉の翻訳」.....	27
「心と言葉の翻訳」での翻訳対象は言葉ではなく思考（心の働き）	27
「心と言葉の翻訳」の全体図	28

はじめに

【要約】

- 「心と言葉の翻訳」は翻訳のパラダイム転換である。
- 翻訳対象を「社会的要請」「個人的要請」「思考（理知）」「情報構造」「モダリティ」「文体」「創発」の7つの要素に分けて分析する。
- 「思考の基本単位」「動的理解」「SPM 分析」「構造図」などの多彩なツールを用いて翻訳という営みを根底から理解していく。
- 以下の4つの目標を設定する。1)翻訳の関係領域を広く深くカバーする。2)英文和訳に代わる新しい翻訳モデルを提示する。3)翻訳学習の総合教科書として機能する。4)日本語人の英語学習ツールとして利用できる。

☆☆☆

翻訳の世界に足を踏み入れてから40年以上がたった。社会人として最初から翻訳の世界に入ったわけではない。大学の経済学科を出て商社に勤めたのだが、自分が商社マンにはまったく向いていないことに気づいてすぐに辞めた。それから——本来ならばもっと若いときにそうすべきだったのだろうが——自分の人生についてはじめて本気で一生懸命に考え、子供のころから大好きだった言葉に関する領域を一生の仕事にしようと決めた。その後、大学に戻って言葉の研究をしたのち、高校の先生になり、それから翻訳関係の小さな会社に就職して、そこで本格的に翻訳という仕事に向き合ったというわけである。

じつは最初、私は翻訳という仕事をどこか馬鹿にしていた。「人の褌で相撲をとる」という諺があるが、ようするに翻訳とはコバンザメのようにオリジナル作品のおこぼれをもらうだけの仕事であり、それは自分自身の作品がつかれない人間のすべきものと思っていたのである。はやくこんなマガイモノの世界から抜け出して自分自身の作品をつくりたいと思っていた。

しかし実際に翻訳の仕事をおこない、翻訳の研究を進めていくうちに、その考えが大きく変わっていった。本物の翻訳とはたんに原文のテキストを異なる言語にコピーすることではなく、原文の作者と訳者の心を一体化させつつ、言語的な差異や文化的な差異、さらには認識的な差異までも乗り越えて新たな価値をつくりだすという、きわめて創造的な行為であることに気づいたのである。そしてこのことに気づいたとき、私は翻訳を自分の一生の仕事とすることに決めた。

その後は、翻訳者として仕事をしたり、小さな翻訳会社の経営をしたり、翻訳学校の先生をしたりと翻訳に関するさまざまな領域をめぐり歩いてきた。そのようにして生計を立てながら、日本語・英語の文章と翻訳についての研究を続けてきた。その研究と実践をまとめたものが、「心と言葉モデル」であり、その中核作品のひとつが、この「心の言葉の翻訳」である。

「心と言葉の翻訳」は、翻訳のパラダイム転換

「心と言葉の翻訳」は従来の翻訳と翻訳に対する「観」が本質的に異なっている。心と言葉の翻訳では「言葉から言葉へ」ではなく「心から心へ」という視点から翻訳のメカニズムを総合的に解明する。その意味において「心と言葉の翻訳」は翻訳におけるパラダイム転換となるものである。

「心と言葉の翻訳」では翻訳対象を「社会的要請」「個人的要請」「思考（理知）」「情報構造」「モダリティ」「文体」「創発」の7つの要素に分けて分析するとともに、「思考の基本単位」「動的理解」「SPM 分析」「構造図」などの多彩なツールを用いて翻訳という営みを根底から理解していく。

「心と言葉の翻訳」の4つの目標

「心と言葉の翻訳」では、以下の4つの目標を設定している。

1 翻訳の関係領域を広く深くカバーする

第一に、本「心と言葉の翻訳」シリーズは翻訳という営みに関係する領域をできるかぎり深く広くカバーしようとしている。翻訳の真の価値を見極めるためには、翻訳が思考や社会に果たす役割、言語の本質、人間の思考プロセスといった思想的な領域から、翻訳論や翻訳技法、ビジネスとしての翻訳のあり方や進め方といった具体的な領域に至るまで、翻訳に関わるあらゆる領域を、包括的かつ有機的に考察することが必要不可欠である。そのため、「心と言葉の翻訳」シリーズでは、日本語や英語といった言語の領域のみならず、思考や認識の領域にまで踏み込んだ考察や、具体的な訳出技法まで、非常に幅広い領域について論じている。

2 英文和訳に代わる新しい翻訳モデルを提示する

第二に、上に述べたような考察をもとに「心と言葉の翻訳」では、英文和訳・和文英訳モデルに代わる新しい翻訳モデルである「心と言葉の翻訳」を紹介している。その新しい翻訳モデルは従来のような言葉と言葉をつなぐだけの翻訳モデルではなく、本質的に異なる2つの世界に生きる人間と人間の心と心をつなぐことを中心に据えた翻訳モデルである。

英文和訳は過去百数十年にもわたって日本に君臨してきた翻訳モデルである。そのルーツをたどれば千数百年の伝統を持つ漢文訓読にもつながる。英文和訳を使ってこれまで膨大な数の翻訳書がつくられ、それが日本の西欧化（近代化）を支えてきた。英文和訳という翻訳モデルなくして近代日本は成立しなかったといっても過言ではないだろう。

しかしそうした光の部分の一方で英文和訳モデルには大きな影の部分がある。英文和訳モデルで訳された翻訳書があまりにも数多く出版されたために日本語は歪み、さらには日本語に対する日本人の感性さえも歪んでしまったのである。

「心と言葉の翻訳」では、日本人がそうした歪みから抜け出すために英文和訳・和文英訳に代わるべき新しい翻訳モデルをご紹介します。それが「心と言葉モデル」である。この新しいモデルをしっかりと勉強すれば誰もが一定水準以上の翻訳ができるようになる。

3 翻訳学習の総合教科書として

第三に、本講座は翻訳学習の総合教科書としてつくられている。翻訳に関してはこれまでに数多くの良書が発表されてきている。だがそうした翻訳関連書のほとんどが翻訳に関する特定トピックについて論じたものであり、翻訳の総合教科書として利用するには十分とはいえないものであった。また数多くの優れた翻訳論や実践が残されているにもかかわらず、それらを見捨てた翻訳論議や実践がいまも一部で行われている。先達が残してくれた貴重な資産を現在の翻訳者たちは十分に使いこなせていないのではないだろうか。そしてその理由のひとつが翻訳学習に関する総合的な教科書がないからではないかと私は考えている。そこでそうした教科書を自分の手でつくってみようと考えたわけである。

「心と言葉の翻訳」をきっかけとして本書とはまったく異なるタイプの翻訳学習の教科書が今後生まれてくることを強く期待する。本講座には私の翻訳観が色濃く反映されているが、そうした翻訳観とは異なるアプローチでつくられた翻訳の教科書がつくられてほしいと願っている。そのような選択肢が増えれば増えるほど日本の翻訳はよいものになっていくに違いない。

4 日本語人の英語学習のために

第四に、この「心と言葉の翻訳」を含む「心と言葉モデル」は、日本語人の英語学習に一石を投じることを目指している。なおここでいうところの「日本語人」とは、日本語で世界を捉え、ものごとを考え、日本語で自分を表現し、日本語で生活を送っている人間のことを指す。人種や国籍などは関係がない。

日本語での世界の認識や思考のあり方をメインシステムとして有している「日本語人」にとって英語を学ぶことの目的とは英語を認識と思考のサブシステムとして獲得することにある。メインシステムを日本語から英語へと切り替えることではない。そんなことをすればその人は「日本語人」ではなくなってしまう。

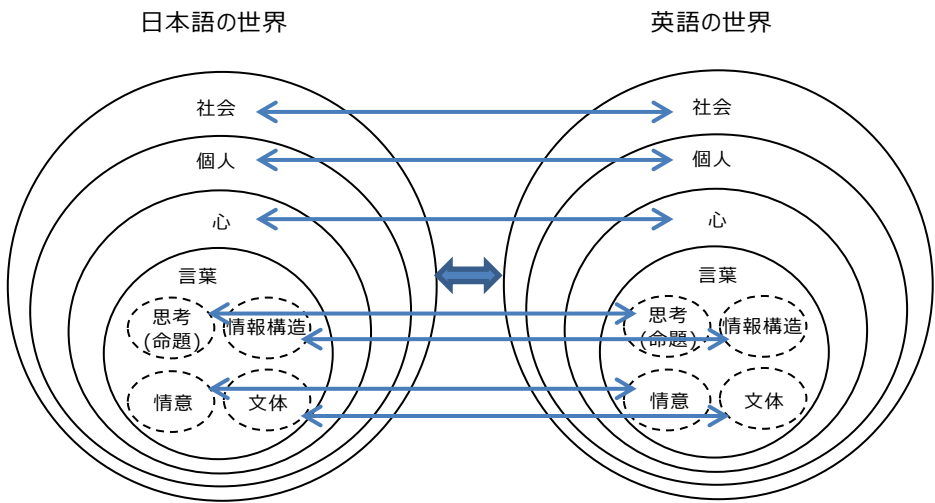
たしかに、過去の文法訳読法のように英語学習を暗号解読として捉えて日本語に置き換えてから理解するやり方では、英語を英語として習得することはできない。しかしだからといって、英語を日本語と安易に切り離してしまい、英語だけを単独で学習することは非常に危険である。それは「英米人になるための」英語学習ではあっても、「日本人のための」英語学習ではない。

日本人のための英語学習においては、日本語の世界と英語の世界のあいだを自由に往来できる能力を身につけること、すなわち本当の意味での翻訳力を習得することが必要不可欠である。「心と言葉の翻訳」はそうした観点からみて日本人の英語学習を変革するうえで非常に重要な役割を果たすものである。

本書をつうじて多くの方々に本当の翻訳の世界を体験していただければ幸いである。また本書が日本人の今後の英語学習の一助になれば望外の喜びである。

成瀬由紀雄

【理論編】



1 章 翻訳の前提

【要約】

- 人間は、いきものとしての認識、言葉のレンズを通しての認識という、ふたつの方法でこの世界を認識している。
- そのため、言葉が違えば世界の認識の仕方が変わる。ゆえに、英語ネイティブの世界認識と日本語ネイティブの世界認識とは同じでない
- 人間は、言語を通じて世界を「モノ」と「コト」とに切り分けて世界を認識している。
- 人間は、「天の視点」と「人の視点」という2つの視点を切り替えながら世界を認識している。

☆☆☆

1. 言語・思考・認識



言語・思考・認識の関係を氷山に例えてみたい。この氷山が表わしているのは人間の心である。その大部分は海の下に沈んでいる。海の上に見えているのは、わずか一部分だけに過ぎない。それが言語である。そして海の下に見えない大部分が思考と認識である。

これまでの翻訳では、海の下にある思考と認識のことをあまり考えてこなかった。見える部分の言語だけを移し替えようとしてきた。しかし「心と言葉の翻訳」では、翻訳すべき対象は氷山のすべて、つまり人間の心の働き全体だと考える。したがって翻訳者は海の上に見える部分だけでなく、海に下

に沈んでいる部分も訳さなければならない。言語、思考、認識という3つの領域を理解して、言葉と言葉だけではなく、心と心をつながなければならないのである。

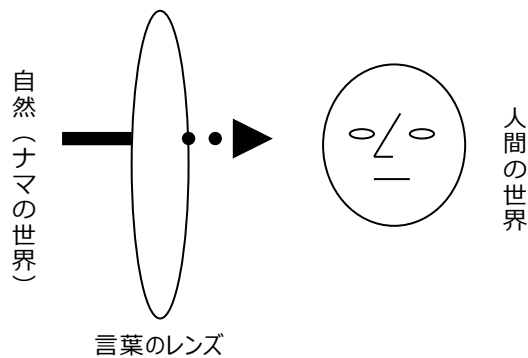
言葉のレンズをとおして世界を認識する

私たちはこの現実世界をふたつの方法で認識している。ひとつは「いきもの」としての認識である。その認識のもとでは、固体は固体として、流体は流体として認識される。この認識のあり方は人間も犬も猫も同じであり、生きるうえで非常に重要な認識方法である。

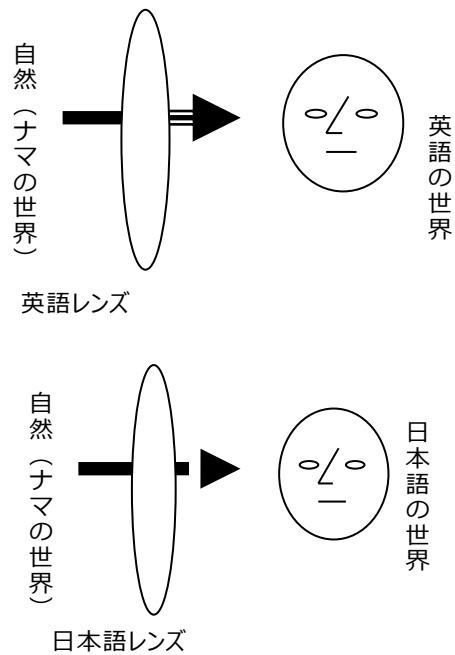
しかし「いきもの」としての認識では、固体を固体だと認識はできても、それを「椅子」とは認識できない。流体を流体と認識できても、それを「池」とは認識できない。こうした認識ができるのは、人間が「言葉」を持っているからである。犬や猫や鳥はそういう意味での言葉は持っていない。彼らの世界には「椅子」も「池」も存在しない。言葉があるからこそ、椅子も池も春も愛も、そこに存在するのである。

しかし、ここに問題が生じる。言葉によって「椅子」や「池」を認識しているということは、言葉が違えば世界認識が変わるということである。つまり、英語を母語としている人の世界に対する認識と、日本語を母語にしている人とでは、世界に対する認識が同じでないということになる。

ここに自然の世界があるとしよう。この世界を、人間はまず犬や猫や鳥と同じ方法で認識する。このように認識された世界のことを「ナマの世界」と呼ぶことにする。つぎに、人間は「ナマの世界」を言葉という「レンズ」をとおして認識する。すると、そこに「椅子」や「池」や「春」や「愛」が生まれてくる。この「椅子」や「池」や「春」や「愛」を含んだ世界が、私たちの生きる人間の世界である。



そしてこの「言葉のレンズ」には、さまざまな種類がある。英語というレンズをとおすと、世界は英語の世界になる。日本語というレンズをとおすと、世界は日本語の世界になる。このふたつの世界は大きく異なっている。



もちろん同じ人間どうしであるから、根本的にすべてが違うわけではない。しかしその違いは一般に考えられているよりもはるかに大きく、特に英語と日本語の世界認識の違いは非常に大きいのである。

「モノ」と「コト」

人間の世界認識の根底にあるのは、「モノ」と「コト」の切り分けである。ただし、最初からこの世界が「モノ」と「コト」とに厳然として切り分けられているわけではない。それぞれの言語を通じて世界を「モノ」と「コト」とに切り分けているのである。

一般的に文法では「モノ」のことを「名詞」、「コト」のことを「動詞」と名付けている。言語学者の研究によると、世界の言語には形容詞や副詞にあたる語彙区分を持たないものはあるけれども、名詞と動詞にあたる語彙区分を持たないものはひとつもないということだ。「モノ」と「コト」との区別は、人間としての共通の世界認識といってよいだろう。

天の視点・人の視点

同じモノやコトであっても、視点が違えば、まったく違うかたちで認識される。その認識の違いによって、言語の形式や表現方法も大きく異なる。

視点には、大きく分けて「天の視点」と「人の視点」が想定できる。「天の視点」とは、全体を上から鳥瞰的にながめる視点である。「人の視点」とは、地上の一点からまわりをみまわす視点である。たとえば、レーシングドライバーとなってレーシングカーを運転しているところを想像してみてほしい。そのとき、あなたはどのような視点からモノやコトをみているだろうか。2つの視点が考えられる。ひとつは、コックピットのなかから外をみる「人の視点」である。その目には、下図のような光景が見えていることだろう。

「人の視点」



もうひとつは、上空から下をみる「天の視点」である。その目には、下図のような光景が見えていることだろう。

「天の視点」



私たちは、物理的には「人の視点」でつねに世界を見ているのだが、それと同時に、可能なかぎり「天の視点」での光景を頭の中で思い浮かべようとしている。そうすることで、自分の位置を主観的だけでなく客観的にも捉えることができるからである。

どの言語でも「人の視点」（主観的視点）と「天の視点」（客観的視点）の両方を使って世界を認識している。しかし言語によって「人の視点」（主観性）を強く持つ言語もあれば「天の視点」（客観性）を強く持つ言語もある。日本語は「人の視点」から世界を捉える傾向がきわめて強い言語のひとつである。一方、英語は「天の視点」から世界を捉える傾向がきわめて強い言語である。

2 章 翻訳の基盤

【要約】

- 「心と言葉の翻訳」の翻訳観の最大の特徴は、言葉ではなく、人間を翻訳の中心に据えることにある。
- 「心と言葉の翻訳」の翻訳観の根底には、人間と社会に対する新しい価値の創造がある。
- 翻訳においては効率性や簡便性の追求に重点をおいてはいけない。
- 言葉にとって絶対に失ってはいけないものは豊かな生命感である。翻訳文では、心に響く生きた文章を生み出すことが翻訳の本質である。
- 「心と言葉の翻訳」では翻訳に対して次の前提を設けている。(1)完全な翻訳はあり得ない。訳文は翻訳者によって異なる。(2)翻訳は原文に忠実かどうかでなく、生み出した価値の大きさを評価する。(3)「ことば」ではなく「こころ」を翻訳する。(4)「思考の基本単位」を翻訳の基本単位とする。(5)テキストを全体として翻訳する。(6)英日翻訳と日英翻訳に同じ手法を用いる。
- 翻訳の際に翻訳者が必ず守るべき規律は次の2つである。(1)わかっていないことは訳してはいけない。(2)おかしな文章は書いてはいけない。ただしこれは理想論である。理想と現実のはざまでもがくこと、必死でもがき続けることが現実の翻訳者のあるべき姿である。

☆☆☆

1. 翻訳の基盤

翻訳「術」「論」でなく翻訳「観」が考察の出発点

何かを考察する際には、まず「術」「論」「観」という3つのレベルを峻別することが非常に重要である。「術」とは、具体的な技術のことである。翻訳でいえば、この英語認識はこう処理すればよい、この日本語表現はこの手法ではこの英語表現になるといったことである。「論」とは、なぜそうなるのかの仕組みを考えることである。そして「観」とは、そうした「術」「論」を支える人間や世界に対する見方そのものである。

「観」が確立していなければ、「術」「論」に意味はない。原点となる「観」を明確にすることが、すべての考察と実践の出発点である。

翻訳に関する論議を行う場合も、最初に翻訳「観」を決めなければならない。お互いの翻訳観を確認せずに議論しても、議論は噛み合わないだろう。

「言葉の変換」という翻訳観

翻訳にも、さまざまな「観」を設定できる。最も一般的なものは、翻訳をひとつの言語から別の言語へと移し替える作業と捉える翻訳観である。おそらく、ほとんどの人が、そのような見方のもとに翻訳を捉えていることだろう。

言葉の変換としての翻訳には多様なものがある。そのうちの現在の代表例と呼べるものはコンピュータ翻訳である。翻訳を情報処理のひとつだと捉えて、その処理をコンピュータプログラム上で最大限に効率よく行うことが、その目標となる。

人間による翻訳でも、翻訳とは言葉を言葉に移す行為と捉える考え方が主流である。ただし、たんに言葉を機械的に一対一対応させるだけでは不自然な訳文ができてしまうため、人間によるチェック機能を働かせる点がコンピュータ翻訳とは違うところである。

2. 「心と言葉の翻訳」の翻訳観

言葉ではなく人間を中心に据えた翻訳観

「心と言葉の翻訳」の翻訳観の最大の特徴は、言葉ではなく、人間を翻訳の中心に据えることにある。

翻訳とは、たんに異なる言語体系を正確に変換する行為ではない。それは人間の心をつなぐことによって新しい価値を生み出し、人間とその社会や文化のために役立つ何かをつくりだしていく営みである。

そうした翻訳をするためには、まず人間の心とは何かを深く理解しなければならない。さらには、人間とは何か、その人間がつくりだした社会や文化とは何かを深く理解しなければならない。そうした総合知を身につけることが翻訳学習の要諦である。翻訳研究とはすなわち人間研究なのである。

実践につながってこそ翻訳研究

「心と言葉の翻訳」の翻訳観の根底には、人間と社会に対する新しい価値の創造がある。したがって「心と言葉の翻訳」では社会での実践を最重視する。翻訳は料理と同じように日々の営みである。実際に台所で使えない料理理論に意味がないように、実際の翻訳に利用できない翻訳理論に意味はない。

効率性や簡便性はほどほどに

日々の営みであるからこそ、翻訳には効率性や簡便性が求められる。ときには出来合いのインスタント食品を食卓に出さざるを得ないように、翻訳でも出来合いのフレーズを再利用するケースも起こり得る。これは仕方のないことである。

しかし、効率性や簡便性の追求に重点をおいてはいけなない。毎日インスタント食品ばかりでよいはずがない。言葉も同じことである。心のこもった言葉に数多くふれてきた人間には豊かな心が育つものである。その反対に、心のこもっていない言葉に数多くふれて育ってきた人間は、心のこもった言

葉とそうでない言葉の区別がつかなくなりがちである。これは人として不幸なことであり、社会にとっても大きな損失である。

心に響く翻訳文を

ベテラン翻訳者のなかには「自然な」訳文の作り方のテクニックを身につけてしまった人たちがいる。具体的には、無生物主語はこう訳す、受動態はこうにする、関係代名詞節はこうして処理する、といったさまざまな「翻訳テクニック」である。専門用語の選び方にも長じている。それぞれの分野にあわせて専門辞書のなかから最も「正確」な訳語を選び出すための知識と技術といってもよい。そしてこうしたことを習得した翻訳者のつくった訳文は、一見すると、とても「自然」で「正確」に見える。

だがこうした「自然さ」や「正確さ」に重点を置き過ぎるためだろうか、そうした翻訳者のつくる文章の多くが、言葉にとって絶対に失ってはいけないもの、豊かな生命感に欠けている。彼らの文章を読んでいても、心には何も響いてこない。それは、まるで美しい「造花」のようである。

翻訳文は「造花」であってはならない。生きた本物の花でなければならない。豊かな生命感にあふれ、かぐわしい香りを放つ、サクラでありバラでなければならない。翻訳という仕事は、たとえば英語の花に似せた日本語の造花をつくりだすことでは、決してない。もとの花とよく似てはいるが、しかし正真正銘の日本語の花をつくりだしていくことが、翻訳という営みの本質なのである。

こうしたことをいうと、それは文学などの翻訳の話であってビジネス翻訳とは関係がないのではないかという意見もある。そんなことはない。政治であれ法律であれビジネスであれ、言葉はつねに生きていなければならない。つくりものでよとした途端、そこにある人間の営みもまた、その生命力を失う。政治は腐敗し、法律は束縛と化し、ビジネスは単なる金儲けの道具となる。翻訳者はつねに心をこめて、生きた訳文をつくりださなければならない理由がここにある。

3. 「心と言葉の翻訳」の翻訳の前提

上に述べた翻訳観をもとにして、「心と言葉の翻訳」では翻訳に対して以下の前提を設けている。

■前提 1：完全な翻訳はあり得ない。訳文は翻訳者によって異なる

この前提の前半部分、つまり「完全な翻訳はあり得ない」という考え方については、ほとんどの翻訳関係者と共有できるのではないだろうか。いっぽう、後半部分つまり「訳文は翻訳者によってそれぞれ異なる」については、一部の翻訳関係者とは共有できない可能性もある。しかし同じ楽譜でも演奏者が変われば別の演奏になるように、翻訳でもAさんの訳文とBさんの訳文とが違ってくるのは当然のことである。まったく同じ訳文ができるほうが逆におかしいのだと「心と言葉の翻訳」では考える。

■ 前提 2：翻訳は原文に忠実かどうかでなく、生み出した価値の大きさを評価する

翻訳の目的は「原文を超えた新しい価値を生み出す」ことにある。原文にはない新しい価値を生み出さない翻訳は良い翻訳とはいえない。

ここでいう「原文を超えた新しい価値」とは非常に広い概念である。ある言語でしか読めなかった内容を別の言語でも読めるようにしたのであるから、それだけでも翻訳という営みにはすでに「新しい価値」があるといつてよい。さらに訳文が原文よりもわかりやすかったり、これまでにない知識を紹介していたり、新しい表現をつくり出していたりすれば、新たな価値が上乘せられる。このようにして新たに生み出された価値の総合点として翻訳を評価しようというのが「心と言葉の翻訳」の考え方である。

これまでの翻訳では、おもに原文に忠実かどうかという観点から評価がなされてきた。原文に忠実であれば価値が高く、忠実でなければ価値が低いというわけである。しかし前提の 1 でみたように、完全な翻訳はあり得ないわけであるから、語学力や知識の不足による明白な誤訳は論外として、すべての翻訳はある程度原文に忠実であり、ある程度原文を裏切っている。その忠実さや裏切りの度合いを細かく評価することが翻訳の価値を高めるとは思えない。また、原文にあまりに忠実であろうとすると、ほかに生み出すべき価値を見失ってしまう可能性も大いにあり得る。原文にただ盲目的に忠実であろうとする「直訳」はその一例である。

■ 前提 3：「ことば」ではなく「こころ」を翻訳する。

本講座が採用する「心と言葉の翻訳」では、翻訳の対象は「ことば」ではなく「こころ」の働きだと規定している。だから「心と言葉の翻訳」というのだが。

なぜ翻訳の対象が「ことば」ではなく「こころ」なのかといえば、簡単にいえば、言語とは自然物のように人間から分離した客体的な存在ではなく、人間の心を表す主体的な精神活動そのものであるからである。したがってそれを扱う翻訳とは、必然的に言葉をあつかうものではなく、心そのものをあつかうものになるはずである。

■ 前提 4：「思考の基本単位」を翻訳の基本単位とする

言葉ではなく思考を翻訳するという前提を立てると、翻訳の基本単位は必然的に言葉ではなくなる。直訳や英文和訳のように、語や句や節や文を翻訳の基本単位として、語の一対一対応、句や節の一対一対応、文の一対一対応をするという考え方がとれなくなるのである。

「心と言葉の翻訳」では、訳出の基本単位として「思考の基本単位」およびそれが組み合わせられた「思考の複合単位」という概念を採用している。そして私たちの思考とはそれらが組み合わせられた高度な複合体であると規定する。

■ 前提 5：テキストを全体として翻訳する

「心と言葉の翻訳」では、テキストを全体のまま捉えて翻訳するという作業が、分析統合的な作業とともに必要不可欠であるとする。分析統合と全体把握の両方の観点から翻訳を捉えることで、翻訳としての総合的な価値の向上を目標とする。

■前提 6：英日翻訳と日英翻訳に同じ手法を用いる

これまでの翻訳論や翻訳技法の最大の欠陥は、英日翻訳と日英翻訳を総合的に論じたものがほぼ存在しないことにある。直訳/英文和訳の手法を和文英訳に採用することはできない。それを採用しても価値の高い和文英訳にはならないことは誰もが承知している。

「心と言葉の翻訳」では、翻訳の理論と技法はつねに双方向であるべきだと考える。さらに、日本語だけに通用するものではなく世界のどの言語の翻訳にも通用するものでなければならないとも考える。世界で最も困難な翻訳実践である英日・日英翻訳を極めることで、世界のどの言語でも通用する翻訳モデルをつくり出していくことが、「心と言葉の翻訳」の最終目標である。

4. 翻訳の規律

以下に、実際の翻訳作業の際に翻訳者が必ず守るべき規律を2つ挙げる。実際の翻訳作業での規律は、この2つだけである。この2つの規律を守ることができれば、その翻訳は必ずよいものになると断言できる。

■規律 1：わかっていないことは訳してはいけない

わかっていないことは訳してはいけない——まったく当たり前のことのように思えるかもしれない。しかし、この当たり前のことが多くの翻訳者のあいだで守られていない。実際の翻訳では、わかっていないのに訳されてしまっているケースがきわめて多いのである。その理由は、多くの翻訳者が「わかっていない」ということをわかっていないからである。なんとなく、わかっているつもりになっている。

英日翻訳の例で、具体的にみてみよう。まず英語の語彙力である。もし辞書を使わなければ原文テキストが読めないようならば、それは「わかっていない」ということである。わかっているのならば、辞書など必要はないはずである。知らない語や表現があるテキストは正確に読むことができない。日本語のテキストで考えると当たり前のことなのだが、これが英語テキストとなると、辞書で意味を調べてそれがわかれば、テキストの意味も十二分にわかつてしまうのである。

構文力も同じである。前からスムーズに一度も後戻りせずに読めてこそ、センテンスやテキストが「わかる」のである。文法知識を駆使して構文解析をしなければわからないのであれば、それは「読んでいる」のでない。「暗号解読」をしているのである。

すなわち、わからない語彙がなく、前からスムーズに読んでテキストの内容や魅力を瞬時かつ的確につかまえることができること——これが「わかっている」ことの必要条件である。

つぎに、知識である。たとえば、ここに経済学のテキストがあるでしょう。これを訳するためには、それを書いた経済学者の伝えたいことを完璧に理解できるだけの知識がなければならない。すなわち、経済分野の翻訳者にはエコノミストと同じだけの経済学知識が必要になる。同様に、医学論文であれば医学研究者と同じだけの知識が、ファイナンス理論であればファイナンス専門家と同じだけの知識が、翻訳者には必要である。これはなにも学問の世界だけの話ではない。中世ヨーロッパに関するテキストを訳するためには中世ヨーロッパに関する知識が、バレーに関するテキストを訳すにはバレーに

関する知識が、ファッションに関するテキストを訳すにはファッションに関する知識が、必要不可欠である。

ようするに、翻訳者は訳すべきテキスト分野の専門家と同等の知識を持っていなければならないのである。これが「わかっている」ことのもうひとつの必要条件である。ところが、こうした知識レベルに達してもいないのに翻訳をしようとするケースが非常に多い。考えてみてほしい。泳げないのに水泳の教則本が書けるだろうか。ピアノが弾けないのにピアノの弾き方について語れるだろうか。ところが、一部の翻訳者はこのような、できもしないことを実際に行っているのである。

おそらく、悪気はないのだ。ただ、自分には翻訳ができないということが「わかっていない」。それだけのことだと思うのだが、いずれにしろ、そうした翻訳は有害無益の一言である。

■ 規律 2：おかしい文章は書いてはいけない

「わかっていないことは訳してはいけない」が読むことに対する規律であるのに対して、「おかしい言葉は書いてはいけない」は書くことに対する規律である。

おかしい文章は書いてはいけない。これもまた当たり前のことのように思われる。しかしいまの翻訳の世界では、これが決して当たり前ではない。それどころか、「翻訳なのだから少々おかしい表現になるのは仕方がない」「翻訳であるからには表現は斬新であるべきだ」などといった考え方さえ、一部には存在する。翻訳を通じておかしい表現や言葉を生み出され、一部の領域では積極的に受け入れられてさえているのは、翻訳者の翻訳に立ち向かう姿勢が大きくゆがんでいるからである。こうした日本の状況のことを、外山滋比古は「翻訳未熟社会」と呼んでいる。

翻訳者を本気で目指すのであれば、おかしい文章は絶対に書いてはいけない。翻訳者は作家である。そして作家の原点は、自分の文章にプライドを持つことである。自分でもおかしいと思うような文章をつくることは、文章を書く人間としての自殺行為にほかならない。翻訳だからという言い訳は、ただの甘えにすぎない。創作であれ翻訳であれ、つねに自分が書ける最良の文章を世に送り出すのだという気概こそが、これからの翻訳者に求められる必須条件である。

理想と現実のはざままで

まとめておこう。まず、わかっていないことを訳してはいけない。辞書をひかなければ読めないようならば、そのテキストは訳せない。内容に理解できない点があるならば、そのテキストは訳せない。辞書なしですらすらと読みこなし内容や魅力が完璧に頭に入ってきてこそ翻訳という作業が可能となる。つぎに、おかしい言葉を書いてはいけない。翻訳だからといって、創作よりも文章のレベルが劣ってよいということは許されるものではない。読者にとって読みやすく魅力的な文章を書いてこそ翻訳が可能となる。そしてこの 2 つの規律を守ることが翻訳者としての必須条件である。

もちろん、これは理想論である。この論に従えば、翻訳者になるには、辞書も使わずにすらすらと原文を読みこなし、専門家をも凌駕する広範かつ深遠な知識を有し、作家も凌ぐ文才を持っていなければならない。そんなスーパーマンなど、いるはずもない。

現実の翻訳者は、もちろんスーパーマンではない。平々凡々たる人間である。だからこそ、目の前にある原文テキストをなんとか自分のものにするために、辞書を使い、ネットを使い、参考書を読み、あらゆる手練手管を駆使して必死でテキストと格闘をする。それでも、出てくる訳文のレベルは創作

にくらべると往々にしてかなり落ちる。落胆しながらも、それでもなんとかして創作のレベルにまで近づけたいと、また必死でもがくのである。

理想と現実のはざまでもがくこと、必死でもがき続けること。これが現実の翻訳者のあるべき姿だと私は考える。たしかに、現実の翻訳者はスーパーマンではない。しかし、それでも現実に安易に妥協せず、押し流されず、翻訳者としての理想のすがたに一步でも近づこうとする姿勢こそが、これからの翻訳者にとってなによりも大切な資質ではないだろうか。

3 章 「心と言葉の翻訳」

【要約】

- 翻訳のモデル化の最大の意義は、モデル化をすることによって翻訳が属人的な「名人芸」から社会的な「スキル」へと変わることにある
- 従来の翻訳の標準モデルである英文和訳モデルとその派生モデルは、翻訳モデルとしてのクオリティが低く、現代社会のニーズを十分に満たしていない。私たちには英文和訳/和文英訳モデルに代わる新しい翻訳モデルが必要となる。その新しい翻訳モデルのひとつが「心と言葉の翻訳」である。
- 英文和訳モデルは、語と語における一対一対応をその基本原則とする。英文和訳 + 編集モデルは現在の翻訳で最もよく用いられている翻訳モデルである。まず英文和訳モデルで「下訳」をつくり、日本語として不自然な部分の書き換え（編集）をしていく。この場合、原文の英語は英語ではなく日本語の意味を呼び出す単なる呼び出し記号になってしまう。この場合、私たちは英語を読んでいるのではなく、英語のかたちをした記号を通じて日本語を読んでいるのである。
- 和文英訳モデルについては、これまで日本には存在しなかった。これは西欧の文明文化を輸入することだけに専念した明治期以降の「追いつけ追い越せ」型日本のあり方を象徴している。
- 時代は変わった。日本は「追いつけ追い越せ」の情報受信型から、世界をリードする情報発信型の国へと変わっていかなければならない。「心と言葉の翻訳」を使えば、英語から日本語への翻訳だけでなく、日本語から英語への翻訳も同一の翻訳理論と翻訳手法を使うことができる。
- 「心と言葉の翻訳」は「ゲーム・チェンジャー」である。「心と言葉の翻訳」の登場によって、英文和訳モデルは馬車やそろばんと同じ運命をたどることになるだろう。
- 「心と言葉の翻訳」での翻訳の対象は言葉そのものではなく、思考あるいは心の働きである。言葉とは思考（心の働き）の反映だと「心と言葉の翻訳」では位置づける。したがって「心と言葉の翻訳」では、原文から訳文へと直接的に翻訳がおこなわれるのではなく、まず原文を通じてそれを書いた人の心の働きを理解する。そしてその心の働きに対応する心の働きを翻訳者が自分の心のなかにつくりだし、それを別の言語として表出する。これが「心と言葉の翻訳」における翻訳プロセスである。
- 「心と言葉の翻訳」での翻訳対象となる要素は、①社会的要請、②個人的要請、言葉のなかの③思考、④情報構造、⑤情意、⑥文体、⑦創発の 7 つである。「心と言葉の翻訳」では日本語と英語とのあいだでこれらの要素を対応させて翻訳をしていく。ただし、そうした各部分の翻訳の総和が最終的な翻訳になるというわけではなく、それぞれの要素のあいだでの包括関係を前提とする。

- ①社会的要請——「社会」にはそれぞれに個性がある。それぞれの社会的要請（ニーズ）がある。それにあわせて個人のニーズも変わり、個人の心の働き方も変わる。したがって、それぞれの社会の要請に合わせたかたちで翻訳をしなければならない。
- ②個人的要請——文章を書く、読むは個人の営みであるから最終的には社会的グループの判断よりも個人の判断が優先される。したがって翻訳者も想定読者となる個々人の個性について考慮する必要がある。
- ③思考——「心と言葉の翻訳」では分析の単位として「思考の基本単位」「思考の複合単位」という概念を設定している。英語の場合には「Subject-Predicate」を思考の基本単位と規定する。日本語の場合には「補語＋述部」を思考の基本単位と規定する。
- ④情報構造——「心と言葉の翻訳」では情報構造（旧情報・新情報、情報の焦点、情報の重さ、他）を思考と同様に基本的に言語の枠を超えた普遍的なものと規定する。ゆえに日本と英語の情報構造とのあいだには一対一関係が原則的に成立する。
- ⑤モダリティ（情意）——「モダリティ」は「対人的モダリティ」（事象（命題）に対する話し手/書き手の判断や意志を示す言語機能）と「対人的モダリティ」（聞き手/読み手に対する話し手/書き手の配慮や気配りを示す言語機能）の2つ分けることができる。日本語はモダリティを極めて重視する言語であり、その表出を必須とする。英語はモダリティを重視しない言語であり、その表出は任意である。
- ⑥文体——「心と言葉の翻訳」は、文体を「言葉の持つ個性や特徴が書き手/読み手の心に与える影響」と定義する。この定義をベースとして「心と言葉の翻訳」は、日本語と英語のように文化的・言語的差異が非常に大きな言語間でもある程度の翻訳は可能であると想定する。
- ⑦創発——翻訳について考える際に①から⑥に挙げた分析の網から零れ落ちてしまう何かのことを「創発」と呼ぶ。創発がいかに生み出されるかは分析ができない。心と体で感得するしかないところがあり、それゆえに翻訳は技能であると同時にアートでもある。

☆☆☆

1. なぜ翻訳「モデル」か

「心と言葉の翻訳」は翻訳のためのモデルのひとつである。ではなぜ翻訳をモデル化しなければならないのか。

翻訳のモデル化の最大の意義は、モデル化をすることによって翻訳が属人的な「名人芸」から社会的な「スキル」へと変わることにある。

踊りにしても焼き物にしても、ほとんどの伝統芸能や伝統美術にはマニュアルがない。芸の本質はマニュアル化ができないからである。一芸に秀でるためには、先達に教を乞いながら長い修行を重ねること以外に方法はない。もし翻訳がこうした伝統芸能の世界に属するものであるならば、モデル化の必要はなく、そもそも不可能である。

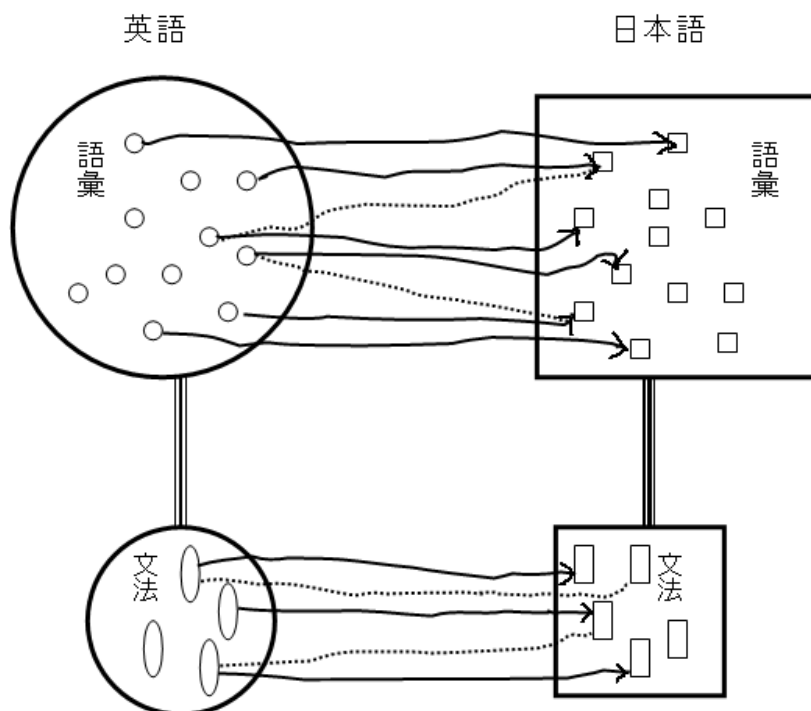
しかし、翻訳は伝統芸能とは違うものである。少なくとも、まったく同一領域に属するものではない。比喩的にいえば、翻訳は大工仕事に似ている。職人芸的なところもあるのだが、同時にマニュアル化つまり手続き規則化できる部分もかなりあるのだ。そこで、マニュアル化できる部分についてはマニュアル化して万人に平等に学べるようにしておき、マニュアル化ができない部分についてはそれぞれに独自の創意工夫をするというのが、翻訳における最も効率的な道筋である。

翻訳のマニュアル化（手続き規則化）には、そのベースとなるべき質の高い翻訳モデルが必ず存在しなければならない。しかし明治以降に用いられてきた英文和訳モデルとその派生モデルは翻訳モデルとしてのクオリティが低く、また現代社会のニーズを十分に満たしていない。したがって、私たちに英文和訳/和文英訳モデルに代わる新しい翻訳モデルが必要となる。その新しい翻訳モデルのひとつが「心と言葉の翻訳」である。

2. 「英文和訳モデル」

「心と言葉の翻訳」を詳細にみていく前に、まず従来の「和訳モデル」およびその派生形である「英文和訳＋編集モデル」について述べておく。以下の図は、英文和訳モデルのイメージ図である。

英文和訳モデル



まず英文和訳モデルは、語と語における一対一対応をその基本原則とする。たとえば、Desk = 「机」、Chair = 「椅子」というようにである。一対一対応で処理できない場合には、一対多対応に切り替える。たとえば、company には基本的に「仲間」、run という語には「走る」を対応させるが、I am running a company. では company に「仲間」、run は「走る」を対応させることができないため、company には「会社」、run には「経営する」という語に対応させて「わたしは会社を経営している」と訳すのである。

英文和訳モデルでは、文法項目においても一対一対応をその基本原則とする。Subject = 「主語」=「～は、が」、Object = 「目的語」=「～を」、past tense = 「過去時制」=「～た」、progressive form = 「進行形」=「～している」、passive form = 「受身形」=「～れる、られる」というようにである。たとえば、The meeting was held on Wednesday. は、「その会議は水曜日に開催された。」と訳すのであり、「会議があったのは水曜日だった。」とは訳さないのが原則である。

3. 「英文和訳 + 編集」モデル

しかし実際には、こうした一対一対応だけでは英語と日本語とがうまく対応しないことは、誰の目にも明らかである。そこで、その際には別の語や文法事項を選ぶことになる。それでもうまくいかない場

合には文全体を書き換える。これが「英文和訳＋編集」モデルである。

英文和訳＋編集モデルは、現在の翻訳で最もよく用いられている翻訳モデルである。具体的には、まず英文和訳モデルで「下訳」と呼ぶべきものをつくる。その「下訳」のなかで、日本語として不自然な部分については書き換え（編集）をしていくという手法である。

こうしてできあがったものが翻訳の最終作品となるのだが、それは一見すると自然な日本語に仕上がっているので翻訳として過不足のないものにみえる。しかし実際には、これはあくまでも英文和訳モデルの一対一対応の派生物であり、その枠組みから抜け出すことはできない。英文和訳の一対一対応/一対多対応をつうじて英語から日本語へと移せなかった部分やそれによって歪んでしまった部分については、そのまま残されるか、あるいは後の編集作業によってさらに歪められてしまうケースが多いのである。また原文では非常に平明な文体で書かれていたものが英文和訳＋編集モデルでは非常に重々しい文体に変わってしまったり、原文ではユーモアとして語られていた題材がシリアスな題材に変わってしまったりするケースもよく見られる。

「英文和訳＋編集」モデルでの訳文は一見すると自然な日本語になっているだけにこうした誤訳が見逃されやすく、その意味では、単なる英文和訳モデルよりも更に深刻な問題を含んでいるといつてよいだろう。

英文和訳モデルだけでは本当に駄目なのか

読者のなかには、それでも英文和訳でなんとかなるのではないかと考えておられる方もいるかもしれない。たしかに英文和訳がパーフェクトなやり方とはいえないことは認めるにしても、これまでも「英文和訳＋編集」モデルを使って実際に翻訳をなんとかこなしてきたではないか、それを全否定するのは少しストイックすぎるし、逆にそうした完璧主義は実利的にはマイナスなのではないのか、といった考え方であろう。

そうではない。英文和訳モデルのような言葉の一対一対応モデルを使っているかぎり、翻訳はおろか、まともな英文理解さえもできないのである。

このことを明確に述べておられるのが、工業英語の第一人者である岡地栄氏である。岡地氏は著書『和英てにをは発想辞典』のなかで次のように述べている。

読解ではまず単語を調べる。単語をつないでみる。文法的知識を動員する。すると天来のごとくぱっと意味が閃くのだ。意味が分かるとは、ある意識内容を持つことである。そして読解では、ある意識内容を持つことで能時終れりとするのである。我々は日本人だから我々の意識内容はもちろん日本語で構成されている。したがって我々日本人は原文の意味が分かったとたん、原文との隔絶が起こるのである。すなわち意味が分かってしまうと、英語を身につけるつもりでその意味が分かった英文を読んでみても、原文は既に分かって潜在意識にある意味を逐次ただ現在意識に呼び出すための役割りしかなくなる。

（傍点、成瀬）すなわちある意識内容（日本語で構成されている）が浮かぶと、それは我々の注意を強くひき、原文の音、いいまわしは現在意識の辺境に追いやられてしまう。これでは英語そのものは身につかない。

『和英てにをは発想辞典』 岡地栄 アイピーシー pp.14-5

英文和訳では、英単語（society や run や if や but など）を日本語の単語（「社会」や「走る」や「もし」や「しかし」など）に置き換え、英語の文法事項（Subject や Object や Past Tense や Passive Voice など）を日本語の文法事項（「主語」や「目的語」や「過去形」や「受動態」など）に置き換えることを、「意味が分かる」と称している。

しかしそうしたかたちで「意味が分かってしまうと（略）意味の分かった英文を読んでみても、原文は既に分かって潜在意識にある意味を逐次ただ現在意識に呼び出すための役割しかなくなる」のである。そのために「原文の意味が分かったとたん、原文との隔絶が起こる」。

ようするに英文和訳における原文の英語とは、じつは、もはや英語ではないのである。それは、日本語の意味を呼び出すための単なる呼び出し記号にすぎない。この場合、私たちは英語を読んでいるのではなく、英語のかたちをした記号を通じて日本語を読んでいるのだ。それを文字として顕在化させたのが、「英文和訳」という日本語である。

さらに恐ろしいことは、この方法に慣れてしまうと、こうしたやり方が正しい英語理解なのだと思います。この「英文理解」をベースにつくられた英文和訳文が少なくとも間違っていないと考えてしまうことである。多くの翻訳者も含めて日本人のほとんどが、この「英文和訳病」に侵されている。この病を治さないかぎり、本当の翻訳はできない。

和文英訳モデルはこれまで存在しなかった

ここから少し視点を変えて、英語から日本語ではなく、日本語から英語への翻訳の現在までのあり方を考えてみよう。英文和訳モデルとは英語を日本語に置き換えて西欧文明を取り入れるためのツールであるから、日本語を英語に置き換えて西欧文明その他に発信するという発想はどこにも見当たらない。したがって、英文和訳と同じ原理のモデル、つまり日本語の語彙と英語の語彙を対応させて日本語の文法と英語の文法を対応させたとしても、それだけではまともな英語にはならないことは誰もがよく知っている事実である。

ようするに本当の意味での和文英訳モデルは、これまで日本には存在しなかったということである。多くの日本人は、英文和訳モデルを使って曲りなりに英語のテキストを読める（と考えている）。その一方で、いざ英語を書こうとしても、そもそもモデルがないために「曲りなり」にさえも書くことができないのである。

このことは、西欧の文明文化を輸入することだけに専念した明治期以降の「追いつけ追い越せ」型日本のあり方を象徴するものといえる。「日本人は英語の読み書きはできるが、聞いたり話したりはできない。これは従来の英語教育が悪いからだ」といったコメントが以前から数多くなされてきた。この意見は、根底的に間違っている。日本人は英語の読み書きが本質的にできていない。なかでも英語を書くということについてはまったくできていない。ゆえに「日本人は英語の読み書きはできる」とのコメントにはいかなる信憑性もない。

新たな翻訳モデルへ

時代は変わった。「追いつけ追い越せ」の情報受信型の時代は、もはや過去の出来事となった。これからは世界をリードする情報発信型の国へと日本は変わっていかなければならない。こうした時

代では英語でのインプット能力だけでなくアウトプット能力も必要不可欠となる。その時代に生きる私たちにとっていま最も必要なのは、インプットだけでなくアウトプットにも適する総合的な翻訳理論とモデルである。そしてそのために、私が新しい翻訳モデルのひとつとして考案したのが「心と言葉の翻訳」なのである。

新しい翻訳モデルをつくる際に私が目指したのは、単なる翻訳モデルをつくることだけを目的とするのではなく、私たちがどのように世界を認識し思考をしているのか、それをいかにして言葉として表現しているのか、それが社会の中でどのようなかたちで受容され機能しているのかのすべてを詳細に検討し、そのうえで日本語と英語の読み書きの相互変換モデルと技法を構築することだった。これを寺院に例えると、大仏殿だけを建てるのではなく、南大門、本堂、講堂、金堂、東塔、西塔、鐘楼などがすべてそろった仏教世界観の全体を構築しようとする試みである。

「心と言葉の翻訳」を使えば、英語から日本語への翻訳だけでなく、日本語から英語への翻訳も同一の翻訳理論と翻訳手法を使うことができる。さらにいえば、日本語と英語だけでなく、あらゆる言語での双方向での翻訳対応が原理的に可能である。

4. 「心と言葉の翻訳」とは

「ゲーム・チェンジャー」としての「心と言葉の翻訳」

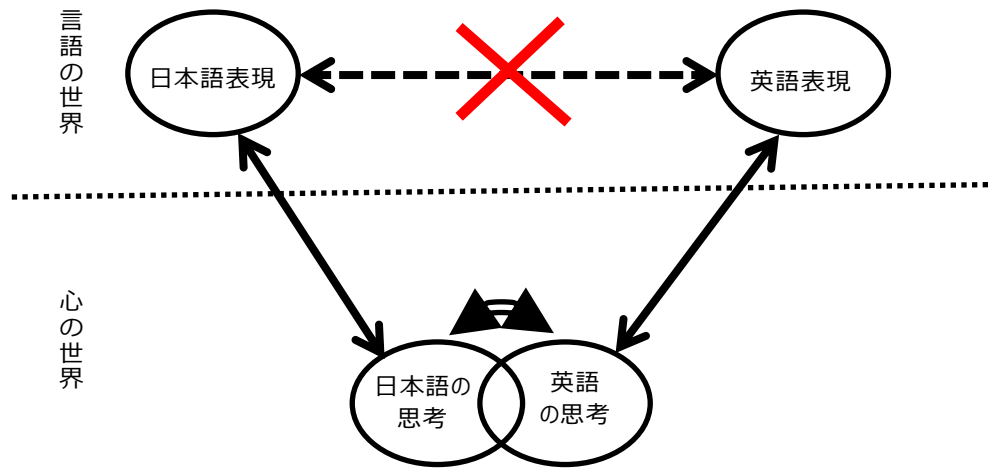
従来の存在を根底から覆すような新しい可能性や思想を持つもののことを「ゲーム・チェンジャー」と呼ぶ。自動車の登場によって馬車はなくなり、電子計算機の発展によってそろばんは机の上から消えた。そして「心と言葉の翻訳」の登場によって、英文和訳モデルは馬車やそろばんと同じ運命をたどることになるだろう。

「心と言葉の翻訳」での翻訳対象は言葉ではなく思考（心の働き）

「心と言葉の翻訳」での翻訳の対象は言葉そのものではない。思考あるいは心の働きである。言葉とは思考（心の働き）の反映だと「心と言葉の翻訳」では位置づける。

したがって「心と言葉の翻訳」では、原文から訳文へと直接的に翻訳がおこなわれるのではなく、まず原文を通じてそれを書いた人の心の働きを理解する。そしてその心の働きに対応する心の働きを翻訳者が自分の心のなかにつくりだし、それを別の言語として表出する。これが「心と言葉の翻訳」における翻訳プロセスである。図にすると以下のようになる。

「心と言葉の翻訳」モデルの概念



「心と言葉の翻訳」の全体図

以下に示すのが「心と言葉の翻訳」の全体図である。

「心と言葉の翻訳」モデル

